

四医師会だより

昔、横綱に胸を借りて

松永沼隈地区医師会 田川内科医院 田川 真也



福山市医師会の先生方には益々御健勝の事と存じます。

私、福山市高西町で田川内科医院を開業いたしております、田川真也と申します。この度、ふくやま医師会広報への投稿を仰せつかり、筆をとる事になりました。

私、母校は東京医科大学であります、所属クラブは“栄光の東京医大相撲部”でありました。岡山県の県北から花のお江戸の新宿へ行った若者が、大都会の甘い誘惑を駆使して仕掛けられた先輩方の巧妙な罠に落ちるのにさほど時間はかからなかったようで、気が

付けば、まわしを巻いて土俵の上で汗と土にまみれておりました。1年生の時はやめさせてもらう事ばかりを考えておりましたが、恐ろしい先輩方ににらまれてはそれも言い出せず、そのまま1年、2年と月日が流れていったのです。もっとも、2年目には巧妙な罠を仕掛ける先輩となり、4年目あたりからはよくにらむ先輩になっていたようですが。

かくして、激しく、厳しい相撲部での6年間を過ごした訳ですが、その間、普通ならば決して味わえないような貴重な経験も沢山させて頂きました。

【全国医歯薬獣学生相撲大会】

当時、医科系では全国に7校しか相撲部がなかったため、即、全国大会でした。

【東日本学生相撲選手権大会】

当時、国技館は蔵前にありましたが、毎年、その天下の蔵前国技館で試合がありました。“土俵に上がるだけなら大鵬と五分”と言われておりました蔵前の土俵に、NHKの相撲中継と同じスポットライトを浴びて上がりますと、やはりそこは別の空間のように思えた事を思い出します。

【東日本学生相撲リーグ戦】

かの靖国神社の相撲道場で毎年行なわれておりました。2年生の時、初めて団体戦の一人として、大将で出場したのを覚えております。

【全国学生相撲選手権大会】

当時は、毎年秋、大阪は堺市の大浜体育館に土俵を築いて開かれておりました。手の届きそうな目の前の土俵で、近畿大学の長岡君(後の大関朝潮、現在の高砂親方)や、同志社大学の服部君(後の幕内力士藤ノ川、引退後は一時、スポーツキャスター)などが学生横綱になるのを見てきましたが、今でも忘れられない名勝負は、第35回大会の、近大の山崎と東京農大の市ノ渡(後の十両市ノ渡)との、学生横綱を賭けての決勝戦であります。山崎は今大会でも小兵の一人であり、一方の市ノ渡は、今大会屈指の巨漢でありました。立ち合い一発、一度は両者ぶつかりますが、小兵の山崎は市ノ渡に上手まわしを取られないように腰を引きます。巨漢の市ノ渡は上手まわしを何とか取って、体を使って投げるか、そのまま軽量の山崎を吊り出そうかとしているようで、執拗に上手を取りに行きます。3度目あたりでしょうか、市ノ渡が上手まわしを取りにいったその瞬間、さっと身を引いた山崎、決まり手は引き落としだったでありましょうか、市ノ渡、たまたま土俵に両手をぱったり着いてしまい、四つん這

いのかっこうとなってしまいました。その瞬間、誇らしげに高々と両こぶしを挙げる小兵山崎の姿、その時の光景は今もはっきりと覚えております。まさに小よく大を倒す相撲の醍醐味、真骨頂の一戦でありました。

【上下関係】

東京医大でも特に武道系は上下関係に厳しく、学年により身分が大きく違っておりました。その当時は、1年家畜、2年奴隷、3年平民、4年貴族、5年天皇、6年神様、OBは霞を食べる仙人と言われておりました。その階段を、厳しくも心優しき相撲部一家の強い結束力に助けられながら、1つ、また1つと登って行った事も、とても大事な経験の1つであったと、今更ながら感じております。

【二子山部屋への出稽古】

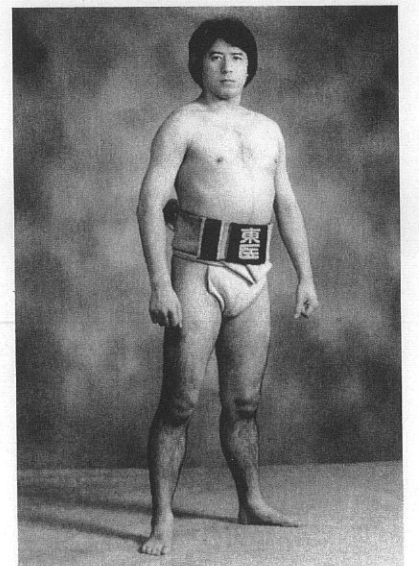
東京医大相撲部の寒稽古は、初場所が開かれる1月中旬に、毎年、二子山部屋へ出稽古に行っておりました。夜もまだ明けぬ時間に、我々相撲部員は皆無言で地下鉄に乗り、南阿佐ヶ谷にある二子山部屋を目指すのでありました。その頃の二子山部屋は、あの若・貴兄弟の父であり、師匠でもある昭和の名大関貴ノ花、横綱、2代目若乃花、後に高田みづえと結婚した大関若嶋津、おしん横綱隆の里等々、錚々たる顔ぶれが揃っておりました。その横綱や大関にも、時には胸を借りて稽古をつけてもらった事は、私の人生の中でも、最も貴重な経験の1つであります。また、二子山部屋の初場所の千秋楽祝賀パーティーは、毎年ホテルニューオータニで盛大に開かれますが、その会場にも時にお邪魔させて頂き、部屋の衆に面白がられて言われるままに歌を歌ったりした事も、とても懐かしい貴重な思い出であります。余談ではありますが、私、平成3年に結婚いたしました、その際、当時日本相撲協会理事長をお努めでありました二子山勝治親方より、誠に立派な祝電を頂きました。もちろん、我が家の家宝になりました。

思いつくまま書いて参りましたが、今振り返ってみても、先輩、後輩、同期の仲間達と共に、一生忘れる事のできない多くの貴重な経験をしてきたものと、改めて思います。

昨今の角界にふと目を向けてみますと、日本人横綱がいなくなってもう久しく、外国人力士も多くなり、やはり少し寂しい気がいたしておりましたが、最近、朝青龍の騒動や、時津風部屋事件など、角界に相次いでいやな出来事が起こっております。昔とは違う、何か大きな気質の変化がそこにはあるような気がいたします。

激しい稽古と厳しい上下関係の東京医大相撲部ではありましたが、そこで国技相撲を経験し、古き良き時代の相撲の空気に触れ、寒稽古では横綱、大関にも胸を借り、何も考えず、ただひたすら汗と土にまみれていたあの頃が、とても貴重な時代でありました。

そう。昔は良かった。最近つくづくそう思うのであります。昔は逆三角形に近かったのに、今は、前から見ても横から見ても、正三角形に近くなってしまった自分の体を鏡で見ながら。



卒業前に、新宿は伊勢丹の写真館で撮影したパネルであります。国技館に飾られる物ではありません。もちろん、今では見る影もございません。